

# 皮内針法 こぼれ話

(回想二十余年)

赤羽幸兵衛

## はじめに

病床にはあるが、心は今も日本中かけめぐっている様な気持で居る。想うは針灸の将来であり、待たれるは我が身の再起である。これのみを考えている。

私のところに皮内針への問合せが今もって後を断たず、中には著書を一度も読まずに質問して来る人もあり、これはいさゝか困る。

それにいちいち御答えしていられぬが、病体の無念さである。昔も今も日本赤羽会の各先生はよく私の立場を理解して居られ、皮内針法の研究と普及に努力され感謝に堪えぬ次第である。誌上より御礼申上げたい。

## 手術の傷アトのカユミ

私は昭和二十五年の末の頃より、知熱感

度測定法が徐々に自分のモノになりつゝ、あり当時は面白さが手伝い、家人は元より知人友人を片ハシから測定材料としたものだ。「測定魔」とでも云う様な私だった。患者には全部測定をやった上、それによって治療していたら、成績はずい分とあがった。(以下「測定」と記す)

しかし、私宅付近の針灸家には、私が何をやっているか、チンプンカンであったと思われる。ある時、一キロくらいの所へ往診した時、一人の若者が胃潰瘍で苦しんでいたから、早速測定した。数ヶ所(数経と云うべきか)に多少の差が出ていたので、適当に治療してをいた。

ある時、例により測定すると左の三里経が右にくらべて「十分の一」に低下している。

「どうかしましたか」と聞くと「一昨日、病院で冷凍植皮術を受けた」と云い左の上腕に包帯がしてあった。「では、当分の間針療はしないから、測定だけ続けて、様子を見たいので、月に二回ずつ寄せてほしい」と云って、測定だけに往診していた。

傷アト(手術)がよくなるにつれ、左右

差の十倍だったものが七倍となり、やがて三倍ともなつて、六ヶ月で左右同一となつた。

包帯を外すと、手術部位はタテ七センチ、横二・五センチ程の広さに皮膚が他の部分から盛り上がっていた。

「左右差はなくなつたがこんなに盛り上がっているのは、衣類との摩擦で何らかの変化が起こるかも知れぬ。もうしばらくの間測定をし、月二回ずつ続けてゆく」と伝えた。

四回目の時は左右差が前回と逆に右三里経が左より十分の一にも低下していた。逆転である。

手術痕がとてカユくなっていると云うので、ワセリンをそれにぬって包帯してから測定すると、左右差は現れなくなった。妙である。

その後もカユい時は左右差を生じ、カユくない時は平衡状態となるのであった。こんなことが何ヶ月か続いて、手術後一年にして、この現象は起らなくなった。

盛り上がって居たそのキズアトも、すっかりその頃は平になっていたのである。この奇妙な現象は、手術後一年で無くなった

のだ。

### 「カユミ」ことの追究

この後も冷凍植皮術を受けた人を何人も見ているが、いずれも途中からだったので、前記の人の様に完全に初<sup>はじ</sup>から観察出来ていない。しかし、何れもよく似た現象を見ているのは同じである。

さて、この「痒い」のがなぜ起きるかである。そして、カユクになると、その反対の側が低下するのはなぜかを考えてみた。

散髪から帰ると、背中がかゆくなり、シャツを脱ぐと短い毛が一本入っていたりするが、取り除けばかゆみは消えてしまう。

紙のコヨリで皮膚をユチョコチョとやると、やはりくすぐったさと同時にかゆさも感ずるものだ。これは皮膚の表面の知覚神経終末に微弱な刺激を持続的に与えると起こるのが、「カユミ」である。

カユミは痛みの一歩手前と学者は云うが、なるほど毒虫に刺された時兩者混合の「痛た痒さ」を感じたことを思い出す。

痒さと測定値低下の関係、これは後年に至り「シーソー現象」の研究の時大いに役に立った。

さて、こゝ迄わかったので、この現象を

人工的に作り出せぬかと考えた。灸の痕がかゆくなったたり、人により針痕をかゆがる人もあるので、細い針がその実験によからうと考えて始めたのが皮内針であった。

### 皮内針のスタート

さて、家人からそれはやり始めた。当初は家人も協力をしてくれない。いくら父であり夫ではあっても、針を体に刺し放しにされるのは不気味であったはずだが、私は困った。さて、私の左の膝は二十年前に捻挫し、それが完全に治ってはず、急にまげたりするとギクッと音がして痛くなり、数日間歩けぬことがしばしばあった。針灸してもあまり効かぬ。

ある時、市内の針灸師に治療してもらったが、深針の故か痛くて帰途自転車から下車の時、足が地につかず。そのまゝ二週間も床にいたことがあった。

その難症の膝に試すことにした。これなら自分で試せる。早速左脚を伸ばしたまゝ、膝の上の圧痛点に細い針（一番針）を刺して折りまげ、一昼夜放置したが少しもよくはならない。

二十四時間後抜針すると絆創膏に出血があり小さい赤い点が着いていた。皮膚面に

異状はない。

毫針を刺して出血があることが時にはあるが、皮内針（原型）を刺入してをいて出血したので「私は弱刺激のつもりだったが、強刺激だったのかな？」などと考えた。

膝を伸ばして皮膚のゆるんだ所へ刺針して放置すれば、膝をまげた時は皮膚が緊張して針は強刺激と変じたかも知れない。

即ち、膝の屈伸の度に「強、弱、強、弱」をくり返したとも考えられた。

グラスとマイナスが反復したために「相殺」されて、何もなかったことになってしまったとも、十分に考えられた。

### 皮内針法「下貼り」の重要性

そこで私はやり方を変えてみた。

今度は膝をまげたまゝで、針を同じ所に刺入した。水平に刺して絆創膏で留めた。それまで苦しかった膝が軽くなった感じがする。

二十四時間固定したら、年来の難症の膝関節痛はケロリと治ってしまい、今もって再発しないのである。これはよく効いた。

それよりこの方法を患者に応用してみた所これ又、驚くべき効果を見た。多くの患

者は「こんなに効く方法は珍しい。先生はこれを他の針灸師には教えず、御自分一人の『専売特許』にすべきです」と云った。

「これで蔵が建ちますね」とも云われたが私にはそれは出来ず広く公開したことは天下周知の話である。初めは刺入したまゝ、一日間置くことが心配だったが、翌日来院した人たちは、みな症状が良くなっており、安心した。

「必らず明日も来て下さい。もし来れぬ人は自分でバンソウコウをはがし（皮内の針も一緒に取れる）、消毒をよくして置くこと」を、毎回くどい位に云って帰した。

しかし、これでは何かスマートではない。毫針の固定では恰好もよくない。

そんな時、妻が「疲れた」と云うので測定した所、腎経に左右差が大きく出ているので右腎俞に、「軸を輪の形にした手製皮内針」を刺入して「大変よくなった」と云われた。

測定すると左右差は消えている。バンソウコウをとり、消毒すると「イタイッ」と、云った。見ると皮膚は破れて居り。四ミリほどの大きさの穴があいていて、皮下組織が見える。この時に「アッ、こいつは

いかんわい。皮内針固定の時に必らずも一枚バンソウコウを『下貼り』をせねばノ」と、ヒントを得た。貴重な体験であった。

以後、現状の様に手製でない皮内針が量産されるようになったが、昔も今も、この下貼りだけは「絶対必要」である。使用時には忘れぬで頂きたい。

#### 失敗例

「赤羽は百発百中、みな成功談か」と云われても困る。失敗例も語るが、これはすべて防げば防げた例であり「下貼り」をせぬためのものである。老婆心からつけ加える。

一週一度の往診の患者だったが、下貼りを皮内針の竜頭の下だけに置いて置いた。このためか一週間後に行くと、バンソウコウの下に何も無い。皮内針が竜頭と共に皮膚を破り、体内に入ってしまった。これは意外である。

皮膚を上から圧してみると、何か固い物に触れ、やゝ痛みが感じられる程度だが、もはや取り出すことは出来なかった。皮内針の軸（竜頭）は大きいのに、なぜ体内に入ってしまったか？。常識では考えられぬ

ことが、実際に起こり、私は改めて難しいものだと感じた。（但し実害はなかった）

又、もう一例は、往診先から夜になり電話があり、かけつけると「何となく苦しい」と云うので、皮内針を取り去ると「アア、楽になった」と喜こんだ。こんなはずはない。

手にした針を見ると針先が釣り針の如くに屈曲している。刺入のミスと考えられた。

針が皮下に入ってしまった、皮膚と皮下筋肉の運動差で屈折して、マイナスの効果を与えたとわかり、改ためて刺し直したが、常に心すべきである。

これは第二著「皮内針法」で図解してあるから、参照して頂きたい。重大な点である。

さて、冒頭の第一例を知人に語ったら、「こんな大きな竜頭が皮膚を破り中へなご、とても入るとは考えられない」と云った。

体験しない人は、そう思うらしい。ムリもないかも知れぬ。私自身でさえ、予期せぬことであつたのだから。

ともあれ、第一例は「下貼り」の不完全

さである。パンソウユウを針の下に小さく一枚貼り、上から大きく一枚貼るか、その下貼りを竜頭の下だけにしたことのみスであらう。

第二例は、刺入が「皮内」でなく「皮下」に入ったため起きたのである。どうか各先生方に於ても、皮内針使用上、毎回初心に帰って心してやって頂きたいとの老婆心で上記した。

### ガンと皮内針

私は「ガンが皮内針で治る」など云うつもりは全たくない。しかし「一応治療はやってみるべきだ」と、申上げたい。

ある乳ガンの人が来た。癌研で何回もオペをやり「もうどうにも方法はないから、貴女のいいと思うことをやりなさい」と云われたと云う。

左側の前胸部の筋肉は全部手術で除かれている。肋骨にくっついていて肉は、ヒカラびて居り。眼をそむけたい無惨さだ。

腕は肩の方から腫れ上がり、シャツのボタンを外すしても入らぬほどになっていた。

皮内針を五六ヶ所刺入し、十数回の治療で大分細くなって来た。前胸部の硬い所も

少しずつ軟かくなり、本人は喜こんだ。

癌研へゆくと「フシギだな。この針を分拆してみよう」と、二三本皮内針を取り外して医師があずかったと云うが、その後、その針がどうなったかは不明である。

さて、第一著の「針灸治療法」の中で「胃ガン」の治験例を発表していたが、その人は幽門狭窄で四ヶ所の病院で撮ったエックス線写真によれば、幽門部がひどく狭くなっていった。

重湯（オモユ）もこれでは通らぬ。半月以上も水以外はとれず、各病院で「後、十日の命」と云われたと云う人である。

測定したら大腸経の変動が激しく「左二」に対して右は何と「一一〇」と、五十倍の左右を現していた。

脾経は「左二」「右九五」と四十七倍余となっている。肝経や腎経も大きな左右差を出していた。

治療をしてより測ると大腸経「左二」「右一一〇」が、「左二」「右七」となり、脾経は左二右五となったのである。

治療五分後には「空腹を感じず」と云い、翌日よりカユ食となり、二ヶ月後からは普通食となって、畑仕事に出る様になっ

た。

更に十ヶ月後に、酒を多量に飲み、翌日心臓マヒで死亡した。

この話に対し、某氏は「あゝそれはガンではなかったんだね。ガンならそんなことはないよ」と、こともなげに云った。

或は病院の誤診であったのかは知らぬが、ガンの有無は別としても、オモ湯さえ通らず「後十日の命だ」と云われた人が一年近くも生き、烟で朗らかに労働し、好きな酒をのんで「コロリ」と楽に死んだのは事実である。ガン死ではない。

家人は非常に私に感謝してくれた。

### ガン患者の話など

また先年、私が倒れる（四十七年二月）前のこと、大阪方面から来た人の話をしよう。

胃ガンの末期だがそれは家人しか知らず、本人は悪性の胃潰瘍と信じていた。大きな人で、健康の時は一一五キロ（三十貫）という力士タイプの人だったらしい。やせても七十八キロ（二十一貫弱）と云う人だが、本人にしてみれば三十八キロもやせ（一人一分）大いに苦慮していた。

食の前の上腹部が苦しくなる。食後も

又、苦しくなってきた。

測定すると、胃経が一八対二五と、七倍もの差となっていた。治療後一八対二五となり、急速に気分もよくなって、夫人と共に「ワッ」と泣き出した。

十日後に来て「あれから体重減少がストップしました上、上腹部の苦痛が消えました」と、話していた。この時も治療した。

そして又、十一日ぶりに第三回目の治療。この時は、もっとよくなっていったが、その直後、私が病に倒れ入院してしまい、残念ながら音信が断えてしまった。残念であった。又、次高岡博士はしばしば無痛分娩に皮内針を用いて成功している。これも面白い応用例だが、針灸師が試してみることはムリであるのが残念である。

○ ○ ○  
痔核について語ってみたい。

私の開業当初、ひどい痔核の人が車で来て腰かけることも出来ぬほどの人が居た。伏臥させて検すると、直径三センチ以上もの痔核（イボ痔）があった。

これに対して、仙骨下方尾骨の側方に針先を上方向へ向け横刺した所（当時、皮内針はない）あんなに大きい痔核は消えてしま

った。一針で消失したのである。毫針を垂直に刺して効いたものは一例もない。皮内針が出来てより、前述の横刺した部位を「上仙」と命名した。

上仙、上リヨウ、次リヨウなどに皮内針をすると、痔によく効くことを発見した。

上仙穴とは「仙骨の真上で、圧痛のある所」である。上リヨウ、次リヨウも、痔疾の人は圧痛があるから、一度試してほしいと思う次第である。

結び

さて病床生活、すでに満四年になる。

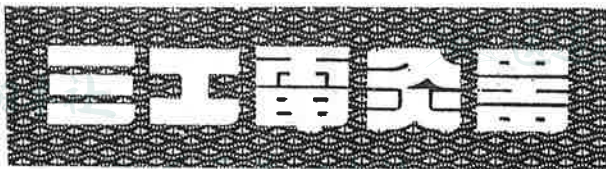
これだけ書くにも、丈夫な時の四五倍もの苦心を要してしまった。しかし、何か得る所あらばと思う。なを、本誌に評論のペンを執っている弁慶史氏からハガキが届いた。

「人物論の取材で岡部素道氏にインタビューした時、氏が『赤羽さんは、針灸中興の人である』と、口を極めて賞揚した」と云う。お世辞ではあろう。

恥づかしいが、しかし病中の私にとり、大変に嬉しい知らせであった。岡部氏と弁氏のあたゝかい心に、礼を述べたい。

（昭和37）伊勢崎市中央町七ノ七

堀越清三氏創案（サンキューでんきゅうき）



- 灸痕がのこらない。 サイズ 16cm×9cm×5cm
- 刺戟量が自由に調節できる。 重量 510g
- 小型で軽く携帯に便利。 ¥4,500 千400円